

アリストテレスの実践理性論

——哲学における意志と言語行為をめぐる考察への序論——

伊集院 利 明

アリストテレスの倫理学は、そのソクラテス、プラトン哲学との間の親近性よりも差異の方が脚光をあびがちである。しかし、アリストテレスの倫理学的著作は、アリストテレスの著作群のなかでもソクラテス、プラトンの哲学の核心的部分を受け継いでそれを深化させた点が多く見られる、しかもそれはとりわけ、アリストテレスがソクラテス、プラトンから離反したと一般にはされている点のいくつかに関してあてはまると思われる。アリストテレス倫理学の考察は、それゆえ、ソクラテス、プラトンの思索の意義の捉え直しのためにも不可欠であり、両者とアリストテレスとを対峙させることは、このギリシア三大哲学者たちが問題としていた哲学の場、ギリシア哲学がそれを巡って思索を深めていった場を明晰化することに繋がるであろう。このことに関して、私は特に次の二つの点に着目したい。

第一は、美の問題と、それと関連する、個別の状況においてなされる行為の問題である。あまり着目されていないことだが、プラト

ンの中期から後期にかけての哲学において、美の問題がその思索の重要な展開軸となっている。このことが最も明瞭な形で現れているのは、『パイドロス』における恋（エロース）と美を巡る思索である。我々がエロースの場面において人を美しいと思う時、我々はその判断を（総合、分割の方法の場合のように）多数の個物から得た美の概念によって行うのでも、他との差異の把握によって行うのでもない。我々は、美しい一人の個人を見て、それだけでそれを美として捉えるのである。我々には、その人がなぜ美しいと言えるのかは説明のしようがない。我々が出来るのは、自分の生き方、自分の実際の行動によって、その美が自分を善き生き方へ誘うものであることを確認することでもって、美を善と関連するものとして把握することであり、そこにしか美の哲学的把握の道はない。このような、我々の見方を先行的に規定するものと、それに対する理解、すなわち、実際の我々の、それぞれの人の個別の状況での行為抜きには成立し得ない理解を巡る思索は、まさにアリストテレスの、徳と

プロネーシス（実践理性）を巡る思索により継承、深化されるものに他ならないと私には思われる。

第二は、ソクラテスのパラドクスとアリストテレスのプロネーシス論、アクラシア論との関係である。私は別稿⁽²⁾において、ソクラテスのパラドクス（「故意に悪いことをする者はいない」）の主張は、それが事実とあからさまに食い違うことをソクラテスが見落としたことに由来するものでも、また、我々の欲望、衝動についての極めて特殊な立場に基づくものであるわけでもなく、むしろ、そもそも事実を記述するのではない一種の言語行為に由来するものであることを論じた。「私は幸福を求めるから善きものを求める」という私の発語は、事実を表すものではないが、私が真剣に自分の生に向かい合ってこの発語をする時、それは、事実を記述する命題の発言を一時的にせよ沈黙⁽³⁾させ、私の生き方を拘束する力を持つ。私には、アリストテレスのプロネーシス論は、このソクラテスの思索と深い部分において極めて強く共鳴しあっているように思われる。「意志」という言葉に正確に対応するギリシア語を持たなかったギリシア哲学者たちにとって、我々が「意志」の問題として扱う場面は、まさに、倫理的問題を巡る言語行為としての哲学という場面にあったと私には思われる。

言うまでもなく、以上は私の研究、考察の見通しを極めて大枠の形で示したにすぎず、また、本論文において、こうした問題点についてのアリストテレスの思索の全体像の素描を、明確な形で提示するというようなことは不可能である。本論文の行うことは、アリス

トテレス倫理学の幾つかの問題点のテクスト解釈上の考察により、そのための一つの足場を築くことである。本論文においてはとりわけ、プロネーシス（*phronesis* 実践理性、賢慮）、ヌース（*nous* 直観）が許容存在について働くと考えられていることの意味を中心に考察を進めていきたい。

以下、『ニコマコス倫理学』『エウデモス倫理学』のそれぞれをNE、EEと略記して言及する。なお、EEとNEの共通巻三卷（EE四、五、六巻＝NE五、六、七巻）はもともとEEに属していたものであるというのが現在ほぼ標準的解釈となってきた⁽⁴⁾が、本論文では、あくまでも便宜上ではあるが、慣例に従い、NE五、六、七巻の名で言及していくことにする。

一

本節では、主にNE第六卷第十一章の一節を手掛かりに、プロネーシスによる、個別から出発する、目的の把握について考察したい。

まず、プロネーシスによる目的把握に纏わる問題点を、様々な可能な解釈の問題点の概要とともに確認したい。アリストテレスによれば、正しき目的を立てるのはプロネーシス、分別ではなく倫理的徳であり、プロネーシスは「目的に向かうもの」（*ta pros to telos* 手段と構成要素）について考察するものである（eg. NE 1145a5-6）。同時にしかし、アリストテレスがプロネーシスが目的を把握するものであることを（少なくとも）、目的の把握に重要な寄与をす

るものであることを⁽⁵⁾示唆している箇所が多数あることは明白である。問題は、プロネーシスの働きが具体的にどのような形で目的の把握につながるのかを、アリストテレスが明確に描いているようには見えないということである。魂の知的部分のうちのプロネーシスの部分、すなわち実践に関わる部分は、思案 (bouleusis) をする部分として定義づけられる (NE 1139a11-13)。プロネーシスとは善き生一般について思案する能力であり、プロネーシスのある人の特徴として挙げられるのは善く思案すること (NE 1140a30-31, 1141b1-14) である。思案はEE第二巻、NE第三巻において、与えられた目的に対する「目的に向かうもの」を考察するものとされる。しかし、この方法が徳に関して適用される場合に、具体的にそれがどのように機能するかは明瞭とは言えない。⁽⁷⁾徳の概念が日常的レベルで了解出来る程度までに限定、明確化されていない限り、それを実現するための手段の考察の糸口をつかむことは不可能に見える。ましてやそれが目的の把握にどう繋がるかはとりわけ不明瞭と言える。NE第六巻において、アリストテレスはプロネーシスの働きとして思案を挙げる他は、プロネーシスが個別にも関わることの重要性を執拗に強調するのみで、それ以上の具体的な方法を示していないように思われる。漠然とした徳の概念を、その構成要素としての「目的に向かうもの」を考察することとspecifyしようとしても、漠然と了解された徳の概念からは、その実現のために何が必要かを考える道 (cf. Met. 1032b6-31, EE 1227b30-31) は、閉ざされているように見える。またアリストテレスは、思案、プロ

ネーシスを主題的に扱った文脈においては、それらがエンドクサに基づく弁証法的な考察と結び付くものである⁽¹⁰⁾というようなことを言明していないし、複数の諸目的間の調停、重要性の査定を、それらを包括するより上位の目的からという形ではなく行う働きを思案に認めるような発言もアリストテレスはしていない。また、プロネーシスに帰納の働きを帰する解釈⁽¹²⁾に対しては、極めて不利なテキスト上の情況証拠がある (NE 1098b3-4) だけでなく、アリストテレスがプロネーシスに帰納の働きがあることを示唆していることが明白であると言えるようなテキストの箇所があるとも言えない。⁽¹³⁾

本節では、アリストテレスがNE第六巻において魂のプロネーシスの部分を思案する部分であるとしているということ、個別の把握の重要性をとりわけ強調していること自体を重視し、次の二つの典拠を手掛かりとして、論理的に善き人が、個別から出発し、思案の働きによって目的を認識していく道の可能性を考察してみたい。

一つの手掛かりはEE第二巻第十章の一節である。⁽¹⁴⁾

T1 すなわち、魂の思案的部分は何らかの原因を認識する部分だからである。つまり目的 (因) は原因のひとつなのであるからである。 (1226b25-26)

思案の有り方の説明の直後に置かれたこの文は、文脈上、思案的部分が他ならぬ思案の働きによって目的を把握する力を持つということを示唆するものとして捉えることが可能である。もしこの発言が、思案には目的が必要だから、思案以外の形で目的を捉える必要があるという思考を背景とした発言であるのならば、当然我々はその目

的の把握のための働き、方法のある程度の具体的叙述を期待するが、アリストテレスのテキストにはまさにそれが欠けているからである。

第二の手掛かりは、NE第六卷第十一章の一節である。

T2 論証に沿って働く直観は不動の第一の項に関わり、(a)行為に関わる論証において働く直観は(b)最終のもの、すなわち他で有り得るもの(許容存在)、(c)すなわち小前提⁽¹⁵⁾に関わる。(d)なぜならこれは目的の端緒だからである。(e)すなわち個別から普遍は生じる。(f)それゆえ、これらに関する感覚がなければならない。(g)それが直観(nous)である。(1143b1-5) (h)それゆえ直観はまた端緒でありかつ終極である。なぜなら論証〔行為の論証〕はこれからおこり(始まり)、これらについてなされるからである。(b9-11)

注記しておく、(h)は(g)にすぐ続くべきものが後の箇所⁽¹⁶⁾に錯入したものであると考えて(g)の直後に移して考えることが出来るが、現在では解釈者たちによって削除されることが多い。また、(d)(e)はそれ自体では、個別についてなされる行為によって目的が実現されるということの意味としても、個別から目的が認識されるということと述べているとも解釈し得る。しかし、(g)の後に(h)を続けて読むのなら、後者が有力である。(h)の中の二つの「これら」が同じもの、すなわち行為の関わる個別を指しているとすれば、(d)く(h)が目的の把握のことを扱った連続性を持つ内容となるからである。(以下、そのような形で(d)く(h)の意味を理解することが可能であり、適切であるということを示していきたい。)

こうした解釈上の諸問題はさておいて、とりあえず考察の手掛か

りを(b)に求めたい。ここで「許容存在」という言葉が(c)との連関において用いられているが、これは明らかに、例えば「他人の酒を飲むべきではない」を大前提とする推論(実践三段論法)における小前提「これは他人の酒である」が「これは他人の酒ではない」になり得るという意味ではない。行為が関わるのは、存在することも存在しないことも可能なもののうち、人間がその生ずるか生じないかを決定出来るところのものである(EE 1206a26-28, b15-16, NE 1112a30-31)。今の例で言えば、許容存在という言葉でアリストテレスが言わんとしたことは、この酒を私は飲むことも出来るが飲まないでいることも出来るということである。この場合注意したいのは(b)に含まれる「最終のもの」という言葉である。もちろん「全ての老人には席を譲るべきである」を大前提とし、「この私の席の前に立っている人は老人である」を小前提とする三段論法を組み立てることは出来る。しかし行為において最終的に問題となるのは、この私がこの席を空いたものにするか否か等⁽¹⁷⁾である。それこそが最終的なもので許容存在なのである。

ここで、こうした個別の許容存在の把握⁽¹⁹⁾がいかに目的の把握のために重要であるかを考察するために、具体例として、倫理的な徳を持つているが、老人に親切にするべきであることを未だ明確には把握していない人を取りあげてみたい。彼はそのようなことを自分の取るべき目的として把握する可能性を、自然的素質、もしくは善き習慣付けによって得ているが、「老人が来たら席を譲るべきである」というパターン化された格率を習ったこともなく、他人がそのよう

な行為をすることを見聞きしたこともないとする。バスの中で彼の席の前に老人が来た時、彼が倫理的徳を持った人でなければ、老人を席にすわらせるという目的は彼には見えない (e.g. NE 1144a34)。しかし同時に、この席が空かすことの出来るものであるということが把握出来なければ、老人をすわらせるという目的を把握することは極めて困難である。そして、その目的が彼が今するべきことであることを明確に把握させるのは、その目的と、今の彼の個別的状况、彼が向かい合っている許容存在とを結び付ける思案の働きに他ならない。そして、彼は席を譲ることが出来るゆえに行動するのではなく、この老人に楽をさせるということを目的として行動する。彼は、あくまでもこの老人に楽をさせるべきだから、そしてそのためには自分が立つて席を空けることが必要でそのことが目的の実現につながるから、席を立つのである。

この例は、我々の倫理的思考での目的の把握において、個別的状况を、我々の行為の対象となる許容存在として様々な行為の可能性の相の下に捉えること⁽²⁰⁾の重要性と、思案の果たす役割を明確に示していると言えると思われる。この場合、目的を与えるのは確かに倫理的な徳である⁽²¹⁾。しかし、与えられているということと明確に認識するということは異なる。漠然と老人に何かをしたいという気持ちがあっても、それは、可能な行動を目的―手段連関のうちに結びつけて捉えない限りは、明確に目的としては把握されず、また、実現化されないがために、いずれは消えてしまし得るようなあらわれにすぎないものである。プロネーシスの伴わない徳は、このような意

味において、正しい目的を認識させるための言わば漠然とした傾向にすぎない。目的を目的として捉えることは思案の働きのなしには有り得ない。そして、現実には我々が多様な個別的状况において倫理的に行動しようとする際に、また、自分の目的を考えるために重要となるのは、その個別的状况が自分によってどのように変え得るのかの直観であり、それがあつてはじめて、漠然と見えてくる目的と個別的状况を結び付ける思案の働きは成立する⁽²²⁾。この意味で、思案は個別的状况の直観からおこる。そして目的を理由として、その個別的状况をとうするかについて思案はなされるのである。

思案の働きと許容存在の直観の働きを、目的の把握において重視するアリストテレスの立場を、理解するための筋道を考察してきた。この解釈を裏付け、意義を明確にするための考察を、以下さらに進めていきたい。

二

T2のうちの(b)「最終のもの、すなわち他で有り得るもの」に続く(c)「すなわち小前提に関わる」は奇妙な表現である。思案の道筋が実践三段論法(推論)の形に書き換えられる際、「BはAである」がCはBである、それゆえCはAである⁽²³⁾(①型)の形に書き換えられるにせよ、「A(目的)のためにはBが必要であり、BのためにはCが必要である、ゆえにCを実現させる」(②型)に書き換えられるにせよ、いずれの場合でも、小前提自体がそうであることもそうではないことも可能なものであるのではなく(実際に可能なも

のであるとしてもそのことは問題ではない)、それに含まれるCが許容存在であるだけである。私は、この点に関してアリストテレスには混同があり、アリストテレスには、どちらの型で実践的推論の三段論法が書き表されるにせよ、それに含まれる最終のものを自分の力で変え得るような許容存在として、そのような可能性の相の下で把握するのではない限り、実践の、行為の推論の小前提としての小前提を把握したことはないといえ、捉える傾向が極めて強くあると考える。

もちろん②型だけを考えれば、BにはCが必要だという小前提ならば、Cが我々個々人によつて実現され得るものとして捉えられるのではない限り行為の小前提とは言えないようなものであると考えるのも極めて自然なことであるから、この混同は強いて混同と言う必要のないものであるかもしれない。しかし、アリストテレスが①型と②型との、また、実践三段論法と思案との間の区別(ないしは関係)を明確な形で考察していたとは到底考えられない。

NE、EEにおいてアリストテレスに実践三段論法と思案とを混同する傾向が強くあったということは、テキスト上明白である(e.g. NE 1142a21-23, 1141b8-21, 1142b16-26, EE 1227b22-32)。アリストテレスは、あたかも思案が実践三段論法そのものであるかのようになっている。もともと、そのこと自体はアリストテレスに混同があったことの論拠にはならないかもしれない。思案が②型の三段論法に書き換えられるのではなく、原理的には①型の三段論法も②型の三段論法とほぼ同様の形に書き換えが可能である、そしてま

た、②型の三段論法、及びそれに近い形のをアリストテレス自身が「三段論法」と呼ぶべきものとして捉えていたと見なすべきテキスト上の典拠が十分に存在するとする論者(Mele)⁽²⁴⁾の主張は、確かに正当であると思われる。しかし、テキストを見る限り、アリストテレスが①型と②型との関係をどのように明確な形で捉えていたと言えるとは到底思われない。

アリストテレスが思案と実践三段論法とを混同していたことを示唆する最も明確な典拠において、アリストテレスは思案を①型の三段論法の形で示している。

T3 思案を巡らす過程においておこる誤謬は一般者と個別のいずれかに関わる。すなわちそれは「全ての重い水は悪い」という点についてであるか、「これは重い水である」という点についてであるかである。(1142a21-23)

このことは1141b8-21についても同様である。(これら二つがT2に比較的近い場所での発言であるということは、T2の考察の上で重要である。)さらに、この混乱は『動物運動論』の実践三段論法の叙述にも見られる。第七章の実践三段論法の叙述において、アリストテレスは実践三段論法の具体例を挙げた直後に、「行為の前提には二種類、すなわち善と可能性がある」と述べる(T01a23-25)。しかし、この言明は、その文脈においてやや奇妙な、読み手を戸惑わせるものになっていると言えよう。直前に挙げられている具体例の大部分が①型の三段論法であるが、「BはCである」という前提自体は、常識的に考えれば、Cが我々が変化させることが可

能なものであるか否かにかかわらず捉えることの出来るものであるからである。⁽²⁵⁾ アリストテレスに①型と②型との関係、思案と実践三段論法との関係に関して混乱があったということは、明らかである。

アリストテレスは、思案の本来的な姿は①型ではなく②型の三段論法であることを明確にするべきであった（もつと言え、それとともに、「CをCにすればBが生じ、Bが生じればAが生じる」という方向の思考が思案の際に果たす役割を、もつと十分に主題化するべきであった）と思われる。タイプBに個物Cが属するかという問いが明確な形で立てられる場合には、それに答えるのは直観、プロネーシスの仕事ではなく、感覚の仕事である（NE 1113a1-2）。そして確かに、タイプAにはタイプBが必要であるといった思考や知識が、思案の過程において重要な役割を果たし得る。しかし、思案は「達成の端緒を我々自身に引き寄せるまで」行われる（EE 1226b13, cf. NE 1112b18-19, 1113a5-6）ものであり、行為されるものは個物（NE 1147a3-4）⁽²⁶⁾ すなわち、その存在、非存在が我々自身に依存する許容存在である。我々は個物Cが行為のその時点において、この自分自身によってどのように変え得るのかを、あくまでも自分の行為の対象の持つ可能性として把握していなければならぬのである。

以上のように、アリストテレスは、思案における許容存在としての個物の把握の重要性を鋭く見抜きながら、それを明確な形では定式化しないままにしたと言える。しかし、この混乱が、個別的状况

から出発する現実的場面における倫理的思考の有り方に加えたアリストテレスの鋭い洞察の意義に比べれば取るに足らないものであることは、言うまでもないことであると私には思われる。

倫理的思考において、思考が許容存在としての個別から出発するということに目を止める時、アリストテレスの「選択」(prohairesis) 概念は理解しやすいものとなる。選択とは、我々の意のままにすることの出来るものに関する思案に基づく要求である（NE 1113a10-11, EE 1226b17）。思案とは、目的に対する「目的に向かうもの」(手段など)を案出するものだが、我々が倫理的行為において、予め目的を立てておいて、それを明確に自覚した上で、そのための手段等を考えることによって行動することとは極めてまねなことである。しかし、アリストテレスによれば、倫理的行為を倫理的行為とする極めて重要な要因が、選択に基づいて行為するということである（NE 1105a28-b5）。このように見ると、アリストテレスの選択概念は不可解なものに見える。しかし、我々が行動する際、我々が直面しているのは具体的状況、具体的個物である。我々が個物CをCにする時、単にそうするのではなく、我々が個物CをCのままにしておくこともCにすることもCにすることも出来るということを念頭に置いた上で、自分が、言わば自分で責任を持って自分の納得出来る目的との連関の意識の下に行動することこそが、倫理的に重要なことであるという考え方は、我々の常識に合致するものである。そして、これまでに見たように、このような個別から出発する思考こそがアリストテレスが倫理的思考として考

えたものと理解することが出来るのである。我々は、倫理的な行動においては、当面する状況CをCにしておくかC'にするかという選択肢がある程度は意識した上で選んでいると言えよう。⁽²⁷⁾「選択は単に取ることでなく一方よりも他方をとという形で一方を取ることである」(EE 1226b6-8, cf. NE 1112a17)。そして、CをC'にすることをこのような倫理的思考によって選ぶ際、我々があくまでもその時に我々に見えた目的を実現したいと思い、そのためにはC'が必要（もしくは最善）だからその行動を選ぶのである以上、思案を、目的を立てた上でその目的に向かうものを求めるものとするアリストテレスの叙述は、実際には個別的情況から思考が発するということと矛盾するものではない。こうした思考をアリストテレスが描いているとすれば、アリストテレスがプロネーシスを説明する際に、それが思案の働きであることと、許容存在としての個別の直観が重要な役割を果たすということ以外に実質的に明らかにせずに、それが目的を把握するものであるとしていることが理解出来るものとなる。そして、このように個別的情況から出発する思考は、我々の実際の倫理的な生き方を表すものとして相応しいものである。我々は、常に予め目的を決めておいてその実現手段を考えて行動しているというよりは、それぞれの与えられた状況のなかで生き、第一次的にはその場その場の具体的で身近な目的に向かい合っている。⁽²⁸⁾

ただしそのことは、この方法がそれ以上の上位の目的の認識につながるものではないということを意味するものではない。個別手段x、y、zの認識が目的aの認識につながるとすれば、目的a、b、

cの把握が、それらを手段とするより上位の目的Aの認識につながるということは、自明のことである。そして、倫理的徳を持つ人には下位の目的群と上位の目的群とが漠然と混然とした形でしか見えなくとも、それに思案の働きが加わるならば、それによって、上位の目的と下位の目的との関係と区別、及び下位の目的群間の区別を通じて、上位の目的が明確に認識されること、さらに、上位の目的の手段となる、それまでには認識されていなかった他の下位の諸目的の認識から、体系的に認識が拡張され得るということも明らかである。

さらに、この方法がとりわけ有効性を発揮するのは、「目的に向かうもの」が目的の構成部分であり、構成部分が目的の内実をspecifyするという場面においてである。漠然とした徳の（例えば勇氣の）概念を、その構成部分を考えることによってspecifyしようとしても、漠然とした勇氣の概念から、その実現のために何が必要であるかを考える糸口を我々は掴むことが出来ない。しかし、倫理的に善き人がa、b、cを目的としている場合に、彼にはそれらを構成要素として抱括する上位目的Aが見えるということが有り得る。彼にとつてはAは漠然とした概念として与えられるものではなく、a、b、cを包括する具体的なイメージをもった統一概念として与えられたものである。そして、そのこと自体を、また、a、b、cが分離されたものではなく統一性のあるものであることを、彼はAから出発する思案の働きによって明確に認識し、徳の概念についての体系的な理解を獲得することになるのである。⁽²⁹⁾

以上のようにして、Z⁶第六巻においてアリストテレスは、その冒頭で解明を約束した、まっとうな分別の与える、我々の行為のための標石 (horos) (1138b34) を明確に示している。⁽³⁰⁾ ただしそれは、我々自身が、アリストテレスの示した指針に従って、我々の個々別々の状況から出発して、我々自身によって把握していくしかないものなのである。

三

実践三段論法の二つの型、①型、②型のいずれにおいても、アリストテレスにはその小前提に含まれる最終的なもの、すなわち許容存在を許容存在として、言わば行為の様々な可能性の相の下で捉えるのでなければ、行為の推論の小前提として捉えたことにはならないとする発想が強くあることを、解釈の展開軸としてきた。本節では、このように三段論法の小前提について考えることによって、アリストテレスのアクラシア論を理解するための重要な手掛かりが得られることを示したい。

アクラシア (無抑制) をめぐるアリストテレスのZ⁶第七巻第三章の叙述は、あまりにも簡潔であり、様々な解釈の余地のあるものである。いかなる解釈についても、この箇所自体とその周辺部の叙述からは決定的な論拠も、決定的な反証も得られそうにないというのが、おそらくは多くの研究者の正直な実感であろうと思われる。この箇所の様々な解釈上の問題点の全てについて明確で説得力のある議論を展開することは、短い論文においては到底不可能であるの

で、上述の本節の目論みにとって重要な論点に絞りを絞り、その他の争点については自分の解釈の論拠の大枠のみを示すに止めたい。また、紙数の制限上、アリストテレスの議論の紹介的な説明は割愛せざるを得ない。

多種多様な解釈がなされてきているが、それらは大きくは「伝統的解釈」、すなわち、アクラシアに陥った者が悪しき行為をするその時点においてはその個別的行為が自分がしてはならない行為であるということとを認識していないとする解釈と、認識しているとする「非伝統的解釈」⁽³¹⁾に分けることが可能である。私自身は後者に与したい。(事柄自体として明らかに後者の方がアクラシアの現実に即した好ましい解釈であるということ以外に、1147a34の「一方はこれを味わうことを避けるように命ずる」という表現が伝統的解釈にもたらす困難⁽³²⁾が小さくないものであると思われる。)しかし、私には多くの点で、多くの伝統的解釈が依拠してきた論点を認めざるを得ないと思われる。まず、実践三段論法の結論が行為であるということはテクスト上動かし難いと思われる。また、1147b9の *teleutaia protasis* が小前提を表していると考えるのは、文脈上極めて自然であり、それを覆すような反証が非伝統的解釈によって提出されているとは思われない。⁽³³⁾そして、第七巻第三章の四つの議論が漸次的にその内実を明確にしているものであると捉えることも、文脈上極めて自然である、それゆえ、第三議論で持っているとも持っていないとも言えることとされているものが1147b9の *teleutaia protasis* と同じく小前提であるということも動かし難いと思われる。

なお私は、最も標準的な解釈が想定しているように、第四議論での善き三段論法と悪しき三段論法の小前提は、同じもの（「これは甘い」）であると理解する。決定的な論拠はないが、人がアクラシアに陥る全てのケースにおいて善き三段論法と悪しき三段論法の小前提が別のものになると考えるのは、非現実的に思われるからである。⁽³⁴⁾

私が本論文全体の論点との関係で特に注目したいのは、結論部と第三議論において、アクラシアに陥った人が小前提を持っていると持つていないとも言えることとされている（1147b10-12, a10-24）ということである。結論部がそれを受けるところの第四議論における小前提は「これは甘い」である。しかし、第三議論でアリストテレスは、持つていても持つていないとも言える知識の例として、学問を本当に持つていえると言えるためには、学問の言葉が「一つの根から出て生い茂るように相互に結び合わなければならない」（1147a22）とする。だが、「これは甘い」のような小前提はそのような体系性を持ったものではない。小前提自体を認識しているか否かということと、小前提を様々な大前提を結び合わせ得るか否かということとは同じ問題ではない。これをアリストテレスが混同しているとするれば、そもそも、アクラシア特有の不知がまさに小前提の不知、もしくは不使用にあるという形でアクラシアの不知の起る場所を明確に限定しようとしたアリストテレスの努力は、意味のないものになってしまう。⁽³⁵⁾ さらに、結論部においてアリストテレスは、人がアクラシアに陥るようになる原因が、まさに彼が小前提を持つていえるとも持つていないとも言えるような状態にあるという点にあ

るとしている（1147b9-12）。しかし、アリストテレスが小前提自体の認識と、それが大前提との関係において取り得る位置の認識とを混同しているのではないとすれば、なぜ持つていえるとも持つていないとも言えるような小前提の知によって善き三段論法が成立しないのに悪しき三段論法の方が成立してしまうのかは不可思議になると思われる。

しかし、アリストテレスが、行為の推論における小前提を、それに含まれる最終の個別者を許容存在として様々な行為の可能性の相の下に捉えるのではない限り、行為の小前提をそれとして把握したことにはならないと考えていたとすれば、アリストテレスの表現は不可思議なものではない。これが甘いものか否かという問いに答えるのは、感覚の仕事であるが、このように個別を行為の対象となる許容存在として捉えるのは感覚の仕事ではなく、ヌース（直観）、プロネーシスの仕事であり、小前提はそれによってはじめて行為の推論の小前提として把握されることになる。単に「これは甘い」ということを把握するだけではその小前提自体を行為の推論の小前提としては持つていえるとも持つていないとも言えることになるのである。

私は、アリストテレスが第一、第二議論で行っていることは、このような小前提の不完全な把握の有り方の準備的な説明であると考ええる。というのも、アリストテレスは第三議論で「持つていえるともいえないとも言える」という状態を、「使用してはいない」という状態の一種として（1147a11-13）挙げている。このことは、アリスト

テレスが念頭に置いている状態が、「使用していない」とも「持っているとも持っていないと言える」とも言い得るような微妙な状態で、それをいかに説明、記述するかに苦心していたことを明らかに示唆している。「これは甘い」ということ自体は感覚によって明確に捉えているが、直観の力を働かせて個物を様々な行為の可能性の相の下に捉えることで、小前提に「目を注いで」(1146b33) それを行為の小前提として所有しているのではないという状態が最初から念頭に置かれていたとすれば、アリストテレスがこのような微妙な状態を記述、説明するのに苦労していたのは理解しやすいことである。人が小前提を持つてはいるがそれを行為の小前提としては持つていないとすれば、そのような、持つていないとも言えるような小前提を大前提と結び付けても、「これは食べてはならない」という言葉が酔っ払いが語る言葉のように (cf. 1147a13-15) 生じるにすぎない。しかし、それが、明確な、行為につながる認識ではないとしても、そのことは、アクラシアに陥った人が行為のその時点において、今自分がしてはならないことをしているということとを全く自覚していないということの意味しはしない。そして、アリストテレスが小前提のこのような所有の有り方を第三議論に至るまでに次第に明確化していくよう説明の歩みを続けていたと考えれば、我々は、第一議論から第四議論に至る議論の流れを完全に自然な段階的なものとして理解することが出来るのである。

我々が行為の小前提の不十分な把握しか持たない時、行為の対象となる「この甘いもの」がいかなる行為の可能性の相の下に捉えら

れるかは、偶然の要因が大きく左右することになる。倫理的な徳を持つ人が、明確に様々な行為の可能性を捉えた上で選択を行うのならば、彼の正しき目的は彼が自分の目的として重視するものである以上、欲望の力が強くとも、彼は正しき目的を選ぶ。しかし、強い欲望の力によって、彼に、甘いものが食べることの出来るものであるという行為の可能性のみが一方的に捉えられるならば、彼は食べるという行動に、飛びついてしまうことになる。このようなことは、彼がプロネーシス、ヌースの力を十分に働かせていれば防ぎ得ることなのであり、アクラシアとはこの意味において、目的観の欠陥によって生じるものではなく、まさに小前提を捉える分別、知の問題に他ならないのである。

四

プロネーシスについての NE 第六巻の、特に第十二、十三章でのアリストテレスの説明の仕方には、プロネーシスは与えられた目的のための手段案出能力 (deinotes) の一種 (倫理的に善き人が持った場合の手段案出能力) である、もしくは目的を認識する能力と手段案出能力との合体であるという理解を誘うものがある。しかし、そのように理解すれば、プロネーシスの統一性と独自性は見失われてしまう。プロネーシスとは、個別的状況から出発して、目的手段連関の考案により、目的を考えるために働く能力であると考えべきであろう。目的が予め与えられている場合は、その目的が個別的状况を見るための糸口を与えてくれる。欲望を満たすための手

段を考案する場合も同様である。しかし、我々が、自分が今立てている目的を吟味する必要がある際、また、より上位の目的があるのではないかと問う際に働く思考の有り方は、それとは大幅に異なる。我々が個別者を様々な行為の可能性の相の下で捉えるよう直観の働きを働かせ続ける必要があるのは、アクラシアに陥らないためだけではなく、目的の考察にとってそれが不可欠だからである。私には、そのような、個別に対する、自分の生に関心を持つ者の能動的な関わり方こそ、⁽³⁶⁾（自分の生き方について考察する者にとっては）我々が「意志」の名の下に考えているものが問題となる領域そのものに他ならないと思われる。

あるいは、人がプロネーシスを完全に獲得し、目的に対する正しい理解を確固とした形で得た場合には、必要なのはむしろ上位の目的から出発する思考であると思われるかもしれない。しかし、私にはそのようなプロネーシス像は単なる虚構にすぎないと思われる。我々が無限な多様性を持つ個別的状況に、しかもまさにこの自分に与えられた、自分が行為の対象とし得るものとしてのそれに常に面し続ける限り、我々は常にそこから出発する形で、目的の正当性を捉え直す必要があるものであり、目的の確固とした理解をいうものがあるとするれば、それはまさに、そのような思考に支えられるもの他に他ならないと思われるからである。その意味で、プロネーシスとは理想化された概念であるとしても、それは、理想化された動性とも言うべきものに他ならないのである。⁽³⁷⁾

註

- (1) 以上、拙論(一)を参照されたい。
- (2) 拙論(二)。
- (3) アリストテレス倫理学に関する McDowell 335 の silencing という論点との関連の考察も、課題として念頭に置いてみる。
- (4) EEとNEの関係に関する Kenny(1)のこれ以外の主張はあまり受け入れられているとは言えない。EEがNEに先立つものである、共通巻はNEにも属するという標準的見解を本論文では作業仮説とする。ただし、私自身、EEを重視する Kennyの企図には(EEをより成熟したものであるとする論点に決して賛成するというわけではないものの)強い sympathyを感じる。
- (5) cf. e.g. Dahl ch. 1, 3 注9〜12に名を挙げた多くの有力な論者たちが様々な解釈の試みとしてきたためである。
- (6) この言葉の意味については cf. Tuozzo 201。
- (7) cf. e.g. Hardie 217
- (8) NE第六巻においてアリストテレスが sophiaよりも phronesisの説明の方に圧倒的な比重を置いているということは Kraut(1)ch. 6, (cf. (2)372-4)の解釈にとってはかなり不利な材料と言えるであろう。
- (9) cf. e.g. Irwin, Wiggins, Nussbaum (cf. Ackrill) こうした解釈の批判的検討については cf. Tuozzo。
- (10) cf. e.g. Irwin
- (11) cf. e.g. Sherman ch. 3 Broadie ch. 4 (esp. 239) なお NE112b24-26がこの解釈の論拠とならないことについては Kraut(2)366-7。
- (12) e.g. Dahl, DeMoss, Tuozzo, Sorabji
- (13) 1143b1-5での「二つのヌースを一方は普遍に、他方は個に関わるという形で明確に区別した直後の「個から普遍が」という表現に、帰納の示唆を感じさせるものがそれほどあるとは思えない。
- (14) アリストテレスの引用は岩波版のアリストテレス全集によったが、文体の統一の都合と解釈の相違により、一部かなり訳を変更した。解釈が異なる場合は議論の中でそれを明らかにするように努めた。
- (15) この hetera protasis は (b)と(c)の関係の問題以外には、「小前提」と理解することを妨げるものはないと思われる。

- (16) e.g. Gauthier-Jolif 加藤(一)422
- (17) もちろん、行為者によってもっと漠然とした形で了解されるものであってもかまわない。
- (18) to kath' hekasta をタイプを表すものとし、思索と実践三段論法とを分離する Cooper の解釈に対しては、Mele(1)295-304、Devereux 484-91、Nussbaum 192、Dahl 29 などによって有効な批判が加えられている。
- (19) この点を重視する解釈としては、Wiggins 231-7。
- (20) Gauthier-Jolif 538 に見られるような(より一般的な)解釈を受け入れない理由は、主に次節において明確にした。
- (21) DeMoss のように、目的の把握のために、帰納が可能なほどに多くの事例に接する必要があると考えるのは、不自然である。
- (22) 直観が個物がどのタイプに属するものかを見抜く点で重要であるとする(e.g. Modrak, Devereux, McDowell) だけでは、T2の(b)や、アクラシア論(NE VIIの3)の第四議論の小前提の問題(cf. Modrak 183)が説明しきれない。
- (23) cf. Mele(1)312-3、Kenny(2)115、加藤(一)390-1
- (24) Mele(1)312-4 など、実践三段論法と思索との関係の明確な整理の試みとしては、他に、高橋が参考になる。
- (25) この点については、Nussbaum 184-201 の論述も参照された。
- (26) 行為はなされた後にはじめて数え得るものなる(Woods 155-6)が、それとは別問題である。
- (27) Cooper 9 (後から説明出来ればよいとする)、Mele(1)284-93 (無意識のうちに思考が行われる場合でもよいとする)のように「選択」の意味を拡張して捉える解釈は、受け入れ難い。なお、NE III-3 の思考、特に1112a34-b9 は、EE と共通巻での成果に基づいて、思索における個人の個別的状态への主體的関わりをより鮮明にする意図をもって展開されたものであるように私には思われる。
- (28) この点では Broadie の反 Grand End view 解釈(これは Dominant End 説(Kraut(1)など)だけに矛先を向けたものではない)に一致する。なお、Broadie の議論に十分なテクニスト上の裏付けが展開されているわけではなさそうなので、cf. Kraut(2)。
- (29) 私は特に Ackrill, Cooper の Inclusive End 解釈を支持するところわけではなさ。(なお、Inclusive End 説と Dominant End 説のそれぞれの長所と短所は、森110-5に極めて明快な形で整理されている。)

- (30) NE VI-1 の(特に1138b34の)解釈については、cf. Peterson (contra e.g. Kenny(1)182)。
- (31) e.g. Mele(2)、Dahl, Broadie, Kenny(2) 私の解釈は Mele のものに最も近いと思われる。
- (32) cf. Dahl 205
- (33) 例えば、Dahl が自分の解釈の論拠として挙げたもの(206-7)と伝統的解釈の可能な論拠として挙げたもの(178)とでは、私には明らかに後者の方が説得力があるように思われる。
- (34) cf. Broadie 306
- (35) Mele(2)150-1 の解釈もこの問題を解消していないと思われる。
- (36) これをとりわけ重視する点で、私は Burnyeat とは解釈の方向をやや異にする。
- (37) 直接言及出来なかった研究文献のうち、特に参考にしたものとして、加藤(二)、岩田、田中を、なかでもとりわけ参考にしたものとして、Anscombe を挙げておきたい。

引用文献

- Ackrill J. 1974 "Aristotle on eudaimonia" in Rorty A. ed. 1980 Essays on Aristotle's Ethics 15-33
- Anscombe G. 1965 "Thought and action in Aristotle" in Bambrough R. ed. 1965 New Essays on Plato and Aristotle 143-58
- Broadie S. 1991 Ethics with Aristotle
- Burnyeat M. 1980 "Aristotle on learning to be good" in Rorty op. cit. 69-92
- Cooper J. 1975 Reason and Human Good in Aristotle
- Dahl N. 1984 Practical Reason, Aristotle, and Weakness of the Will
- DeMoss D. 1990 "Acquiring ethical ends" Ancient Philosophy 10 63-79
- Devereux D. 1986 "Particular and universal in Aristotle's conception of practical knowledge" Review of Metaphysics 39 483-504
- Gauthier R., Jolif J. 1959 L'Éthique à Nicomaque
- Hardie W. 1980 Aristotle's Ethical Theory (2nd ed.)
- Irwin T. 1978 "First principles in Aristotle's ethics" Midwest Studies in Philosophy 3 252-72
- 岩田 靖雄 1985 アリストテレスの倫理思想
- 加藤 信朗(一)1973 ニコマコス倫理学(訳、注)(アリストテレス全集第十三

巻)

- 加藤(さ) 1983 「行為の根拠について」 東京都立大学人文学報 161 125-65
- Kenny A. (1) 1978 *The Aristotelian Ethics*
- Kenny(2) 1979 *Aristotle's Theory of the Will*
- Kraut R. (1) 1989 *Aristotle on the Human Good*
- Kraut(2) 1993 "In defense of the Grand End" *Ethics* 103 361-74
- McDowell J. 1979 "Virtue and reason" *Monist* 62 330-50
- Mele A. (1) 1981 "The practical syllogism and deliberation in Aristotle's causal theory of action" *The New Scholasticism* 55 137-59
- Mele(2) 1981 "Aristotle on akrasia and knowledge" *The Modern Schoolman* 58 137-59
- Modrak D. 1991 "Aristotle on reason, practical reason, and living well" in Anton J. Preus A. edd. *Aristotle's Ethics* 179-92
- 森 俊哉 1992 「マクランディクタ・モティ」チキニム 31 107-26
- Nussbaum M. 1978 *Aristotle's De Motu Animalium*
- Peterson S. 1988 "'Horos" in Aristotle's *Nicomachean Ethics*" *Phronesis* 33 54-75
- Sherman N. 1988 *The Fabric of Character*
- Sorabji R. 1973-4 "Aristotle on the role of intellect in virtue" in Rorty op. cit. 201-20
- 高橋久一郎 1986 「『実践三段論法』の構造」 西洋古典学 37 45-55
- 田中 享英 1989 「行為の意欲について」 北海道大学文学部紀要 37(2) 1-29
- Tuozzo T. 1991 "Aristotelian deliberation is not of ends" in Anton, Preus op. cit. 193-212
- Wiggins D. 1980 "Deliberation and practical reason" in Rorty op. cit. 221-40
- Woods M. 1986 "Intuition and perception in Aristotle's ethics" Oxford *Studies in Ancient Philosophy* 4 145-66
- 伊集院利明(一) 1993 「『ハイドロス』編におけるディアレクティケーとプラトン哲学の転換点」 哲学雑誌 780 143-60
- 伊集院(二) 「ソクラテスのパラドクス」の「パラドクス性」 西洋古典学 44 (1996) 所収予定